

項 目	7. 地震随件事象に対する考慮 (2) 津波に対する安全性
評価手法	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の供用期間中に極めてまれではあるが発生する可能性があるとして想定することが適切な津波を想定する。 ・想定津波による水位変化を適切に評価し、当該の津波発生時の施設への影響を適切に評価する。 ・必要に応じて、津波による二次的な影響について評価する。
確認基準	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の供用期間中に極めてまれではあるが発生する可能性があるとして想定することが適切な津波を想定していること。 ・想定津波による水位変化を適切に評価し、当該の津波発生時の施設への影響を適切に評価していること。 ・必要に応じて、津波による二次的な影響について評価していること。
解 説	<p>1) 評価方法</p> <p>津波の評価に当たっては、既往の津波の発生状況、活断層の分布状況、最新の知見等を考慮して、施設の供用期間中に極めてまれではあるが発生する可能性がある津波を想定し、数値シミュレーションにより評価することを基本とする。</p> <p>2) 津波の想定及び数値シミュレーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・津波の想定に当たっては、敷地周辺の既往の津波の被害状況、プレート境界付近及び日本海東縁部における津波の発生状況、海域の活断層を考慮し、施設の供用期間中に極めてまれではあるが発生する可能性がある津波を想定する。また、日本近海のみではなくチリ沖など敷地への影響が否定できない遠地津波も考慮する。 ・津波の数値シミュレーションに当たっては、津波の断層モデル、津波の波源、海底地形、海岸地形等について適切にモデル化を行うとともに、適切な手法を用いて数値計算を行うものとする。 ・津波の数値シミュレーションは、想定津波の発生域において、過去に敷地周辺に大きな影響を及ぼしその痕跡高の記録が残されている既往の津波について数値シミュレーションを行ったうえで、想定津波の数値シミュレーションを行う。 ・既往の津波についての数値シミュレーションについては、痕跡高の再現性の検討を行い、数値シミュレーションに用いたモデル及び計算手法の妥当性を確認する。 ・想定津波の数値シミュレーションに当たっては、既往の津波の数値シミュレーションを踏まえ、想定津波の断層モデルに係る不確定性を合理的な範囲で考慮したパラメータスタディーを行い、これらの想定津波群による水位の中から敷地に最も影響を与える上昇水位及び下降水位を求め、これに潮位を考

	<p>慮したものを評価用の津波水位とする。</p> <p>3) 津波に対する安全性評価 評価用の津波水位による水位上昇及び水位低下に対して、原子炉施設の安全性に問題とならないことを確認する。なお、確認に当たっては、必要に応じて、取水設備の水理特性による水位変動への影響について留意する。</p> <p>4) 二次的な影響に対する評価 必要に応じて、津波に伴う土砂移動等の水位変動以外の事象に対しても、原子炉施設の安全性に問題とならないことを確認する。</p>
--	---